



表現と実態が異なる開発の進行

佐藤 謙

最近、「自然に優しい……づくり」または「自然に配慮した……づくり」というソフトな表現が呪文のように繰り返し聞こえてきます。でも、このソフトな表現は、内容がひじょうに曖昧で、誇大広告と感じます。海岸工事、河川改修、道路開削など、この表現の後に自然破壊が続く例が多いと思います。また、「自然に優しく、配慮した方法であれば、どこでも自然を変えることができる」と聞こえてしまいます。

同時に「治山、治水、災害防止」、「快適な生活（アメニティ）」または「地域振興」を目的とする開発だから、多少の自然破壊は許されるという考えが見え隠れします。でも、その開発によって目的が果たされ、効果があるか、本当に必要かという点、表現とは反対の結果になる例が余りにも多いと思います。

自然の「ワイズユース」という少し古い流行語も、利用の程度など内容が曖昧であり、「良好な自然を壊した上での本末転倒の利用」と受け取られる結果が少なくありません。本来の「ワイズユース」は、自然を壊さない利用、これまた流行の「持続的利用」でなければならないのに、実態はまだ、逆の意味に結果するケースが多いと思います。

これらの表現は、一つ一つ気になります。それは、この十年ほどの間、これらソフトな表現の流行と北海道の自然の急速な荒廃が一致していると感じるからです。

北海道の自然には、「自然に優しくするため、ワイズユースのためには」、手を触れてはいけない自然や徒歩程度の利用だけが許される自然が含まれております。都市における緑の回復のようにかなり人手を加えて良い自然だけではなく、利用の程度を色々吟味しなければならない自然が多いのです。それに対して、表現だけが一見ソフトで、一様に人手が加わるのは避けなければならないと思います。

私たち日本人は、物事を雰囲気や決意で決め、明確に「ノー！」と言うことを嫌う欠点が指摘されています。でも、明らかに表現と実態の食い違う開発計画に対しては、はっきり「ノー！」と言うべきと考えます。「子孫への遺産ではなく、子孫からの借り物である貴重な自然」は、私たちが守り伝えなければいけないのです。

各地の大切な自然を守るためには、実際には、地元の方が自然の中身を知り、地域の将来を見守る活動が必要です。私たち協会は、「ソフトな表現の開発計画に惑わされない」地域活動への助力に、目を向けなければならないと思います。会員のみならずには、ぜひ、多くの知恵を寄せて頂ければと願います。

さとう・けん

1948年岩手県に生まれる。

北大大学院農学研究科農業生物学専攻修士課程卒。

現在、北海学園大学教養部教授。研究テーマは北海道の高山植生と植物相（特に高山）。